

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：21601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K03120

研究課題名（和文）ヘルスリテラシースキルの次世代への伝達メカニズムの可視化

研究課題名（英文）Visualizing the mechanism of transferring health literacy skills to the next generation

研究代表者

後藤 あや（Goto, Aya）

福島県立医科大学・公私立大学の部局等・特任教授

研究者番号：00347212

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は健康の維持向上に関する情報が個人化される伝達のメカニズムを明らかにすることを目的とした。【小学生】健康教育で提出された食事の絵画を数量化して、子どもは食べる場や地域の特産物を意識していることを明らかにした。【大学生】健康情報の提示の仕方の違いにより生じるリスク認知の違いについて分析を行い、ピクトグラムは一般的な図に比較して好まれ、より信頼されることを明らかにした。【障がい児】保護者とのコミュニケーションに関する冊子を参加型で作成した。主なポイントは、対話のきっかけを見逃さない、生活リズムを整える、愛着関係をきずく、しっかり遊ぶ、しっかり食べる、そして聴く構えを育てることである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

子どもや若者への健康情報の伝え方のポイントを明らかにした。得られた結果は、保健医療従事者向けのヘルスリテラシー研修用の冊子に掲載し、印刷配付した。また、障がい児の保護者向けのコミュニケーションに関する冊子も印刷配布した。

研究成果の概要（英文）：The aim was to clarify the mechanisms by which health information is conveyed and personalized among children and young people. We performed a quantitative analysis of children's drawings submitted during health education workshops and found that children were aware of where they ate and local specialties. Regarding the differences in risk perception depending on how information was presented, university students preferred and trusted pictograms more than charts. We also developed a booklet to improve communication with children with special needs using a participatory approach. The main points listed were to maintain a good rhythm of life, establish a bonding relationship, play well, eat well, and develop a listening attitude.

研究分野：公衆衛生

キーワード：ヘルスリテラシー 母子保健

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

世界保健機関 (WHO) はヘルスリテラシーを、「健康の維持向上のために情報を得て、理解し、使おうとする知識と技術」と定義している。主に欧米の研究から、個人のヘルスリテラシー・レベルは、保健医療サービスの利用や健康状態に影響することが明らかになった。近年その定義が拡大し、住民の「使う」スキルだけでなく、保健医療従事者が「伝える」スキルまでも含むようになってきている。つまり、健康情報を専門的な観点から一方的に押し付けるのではなく、専門家と住民や患者との双方向性のコミュニケーションに基づく伝達が重要である。しかし、子どもを対象とした、医療従事者や親との双方向性のコミュニケーションを踏まえた上で、ヘルスリテラシー推進についての知見は乏しい。

2. 研究の目的

本研究は学童期の親子を対象に、ヘルスリテラシー (健康情報を理解して使う力) の向上を目指し、親から子どもへ健康の維持向上に関する情報がどのように伝わり個人化 (健康情報を自分のこととして受け止める) されるのか、その伝達のメカニズムを明らかにすることを目的とする。対象は健常児および障がい児とし、障がいの有無にかかわらず、子ども達が主体的に健康について考えて行動できるヘルスリテラシーの向上を最終目標とする。この研究の成果は、子どもが自らの健康をコントロールする力をつけるための健康教育に関わる、人材の育成や教材の開発への応用につながる事が期待される。

3. 研究の方法

コロナ禍の影響で研究期間を6年に延長し、子どもとの活動が制限されたために一部対象者を大学生や保護者に変更して、以下の方法を用いて研究を実施した。

(1-1) ワークショップの考案: 基礎資料の収集を行い、国内外の専門家から助言を得た。また、子どもの考えを引き出す具体的なテーマを本研究メンバーと学校教員で検討し、日常的な健康に関わる行動 (食事、飲水や手洗い) と具合が悪い時の病院受診について、小学生向けワークショップ進行案を作成し、2校で試行した。

(1-2) 視覚的データの収集と分析: 試行したワークショップで提出された絵画を量的データ化する手法について統計学の専門家から助言を得て、その解釈の方針について栄養学と小児発達学の専門家から助言を得た上で、分析する手法を開発した。また、分析した結果を「見える化」して提示する方法と、社会と母子保健のつながりについて考察する視点に関して、招聘した専門家の助言を得た。

(2) 疾患に関する健康情報についての分析: 大学生を対象として、健康情報の提示の仕方の違いにより生じるリスク認知の違いについて、既存のデータ分析を行った。

(3) 障害児の保護者を対象とした子どもとのコミュニケーションに関する冊子の作成を、対象者参加型で実施した。

4. 研究成果

(1) 子どもの食事についての絵を、食品、色、形に区分して数量化した上で、量的に分析することができた。子どもは食べる場 (家庭、外食、弁当) や地域の特産物 (図1-1と1-2) を意識していることが示唆された。(Kinoshita L, et al. Frontiers in Communication. 2023; 8: 1008108.)

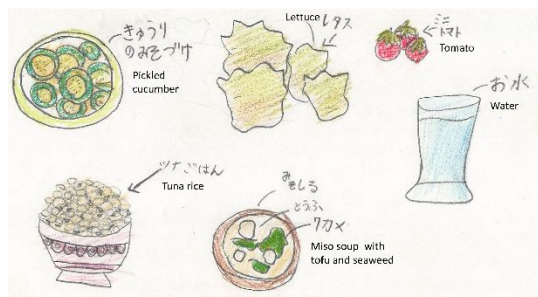


図1-1. 分析した絵画の例

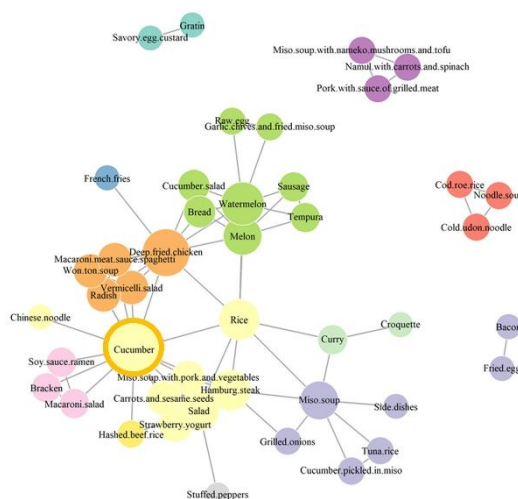


図1-2. 描かれた項目のテキスト解析

(2)ピクトグラムは一般的な図に比較して学生に好まれ、ヘルスリテラシーレベルが低い傾向の場合にも信頼され、より正確なリスク認知につながっていることが示唆された(図2)。(Machida M, et al. International Journal of Environmental Research and Public Health. 2022; 19: 4690.)

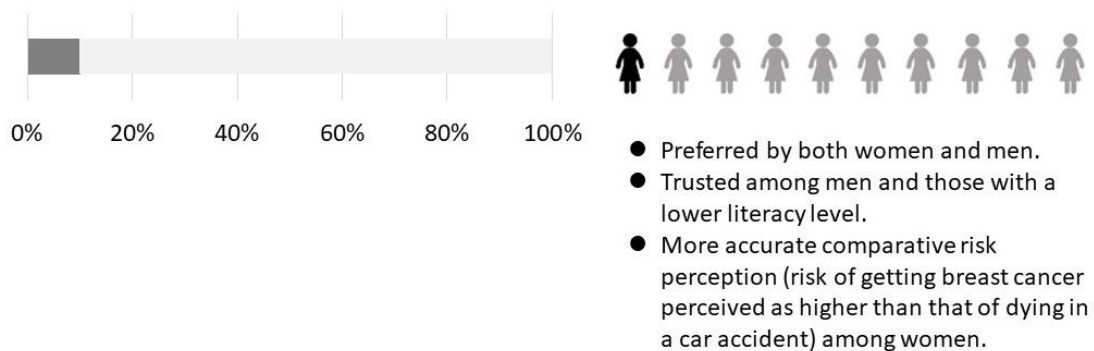


図2. グラフとピクトグラムによるリスク認知の違い

(3)障がい児と保護者のコミュニケーションの主なポイントとして、以下6点について冊子で解説した:子どもからのコミュニケーションのきっかけを見逃さずに応えること、生活リズムを整えること、特定の大人と愛着関係をきずくこと、しっかり遊ぶこと、しっかり食べること、そして聴く構えを育てること(図3)。

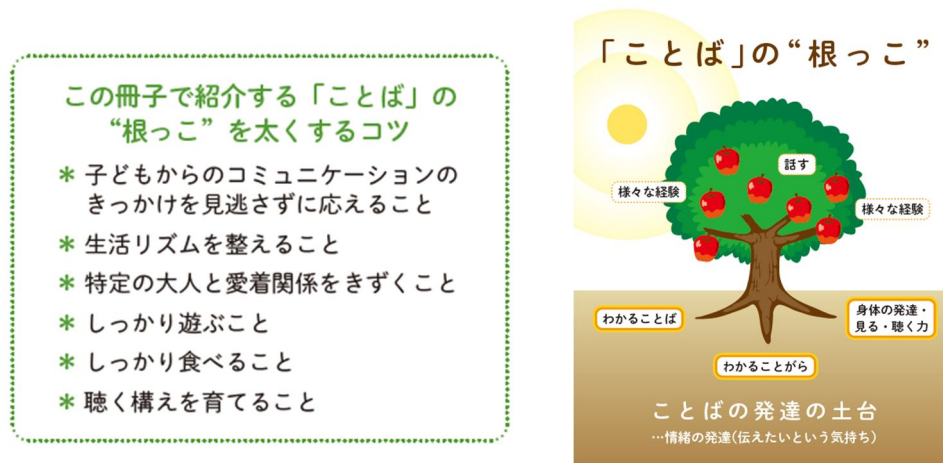


図3. 「ことば」の根っこを太くするコツ

上記(1)と(2)の結果は保健医療従事者向けのヘルスリテラシー研修用の冊子に掲載し、(3)については障がい児の保護者向けのコミュニケーションに関する冊子を作成し、印刷配布した。

- 後藤あや. ヘルスリテラシーのツール:用語の言い換え&健康情報の評価(ヘルスリテラシーの実践). 日進堂印刷所. 2023.
- 植田紀美子. ダウン症のある子どもの「ことば」をはぐくむ. 和泉出版印刷株式会社. 2022.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Kinoshita L, Goto A, Okabe S, Satoh K, Honda K, Ueda K, Murakami M, Nollet KE	4. 巻 8
2. 論文標題 Daily meals in context: A quantitative analysis of elementary school students' drawings	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Frontiers in Communication	6. 最初と最後の頁 1008108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3389/fcomm.2023.1008108	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Machida M, Murakami M, Goto A	4. 巻 19
2. 論文標題 Differences in data trustworthiness and risk perception between bar graphs and pictograms	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 International Journal of Environmental Research and Public Health	6. 最初と最後の頁 4690
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3390/ijerph19084690	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Goto A, Surkan PJ, Reich MR.	4. 巻 30
2. 論文標題 Challenges to changing the culture of parenting in Japan.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Epidemiology	6. 最初と最後の頁 427-428
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2188/jea.JE20190265	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 木下瑠菜、後藤あや、岡部聡子、佐藤健一、植田紀美子、村上道夫、本田香織、熊谷敦史、ケネス・ノレット
2. 発表標題 小学生の食に関する意識：食事の絵の試行的分析
3. 学会等名 第53回日本医学教育学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 町田宗仁、村上道夫、後藤あや
2. 発表標題 棒グラフとピクトグラムの違いによるデータの信頼性とリスク認知の差について
3. 学会等名 第80回日本公衆衛生学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 植田紀美子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 和泉出版印刷株式会社	5. 総ページ数 28
3. 書名 ダウン症のある子どもの「ことば」をはぐくむ	

1. 著者名 後藤あや, 他.	4. 発行年 2023年
2. 出版社 福島県立医科大学総合科学教育研究センター	5. 総ページ数 27
3. 書名 ヘルスリテラシーのツール：用語の言い換え & 健康情報の評価（栄養に関する用語、ヘルスリテラシーの実践）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Health Information https://aya-goto.squarespace.com/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	熊谷 敦史 (Kumagai Atsushi) (40448494)	国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構・放射線医学研究所 放射線規制科学研究部・グループリーダー (82502)	
研究分担者	村上 道夫 (Murakami Michio) (50509932)	大阪大学・感染症総合教育研究拠点・教授 (21601)	
研究分担者	植田 紀美子 (Ueda Kimiko) (60538081)	関西大学・人間健康学部・教授 (84408)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 福島県立医科大学大学院医学研究科国際地域保健学特別講義 Social relationships: Bidirectional influences on the health of mothers and their children	開催年 2019年～2019年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
米国	Johns Hopkins University		